

大切に使い続けたいもの。

このブックの撮影を担当した衛藤キヨコさん。日常を切り取った日々の風景や、旅のワンシーンを綴ったSNSが人気のカメラマンです。自分らしいスタイルで暮らしを楽しむ衛藤さんに、好きなものとの出会いや、ものを選ぶ時のマイルールについてお話を聞きました。

作家ものの器も骨董も、台所の道具も好き

衛藤さんは東大阪市の出身。現在は東京を拠点に雑誌や料理本などの撮影で活躍しています。日頃から取材で良いものを見ることが多く、どんな器が好きになっただけでいいです。「今は白磁ブームで白いものばかり集めています。プライベートでも仕事でも韓国に行くことが多いので、その影響もあるかもしれませんが、やっぱり白ってごはんが映えていいですね」

骨董も好きで古い豆皿や、日本の伝統の技を感じる器を買うことも多いといいます。「職人さんの手仕事による器もめちゃくちゃ好きなんですけど、台所の道具を買うのも好きな頃は実家暮らしだったから器を買う必要もなかったのに、いつかのためにと思って買ったんですよ。しかも二客！それが今活躍していて、買って良かったと思います」

衛藤さんは夫と二人暮らし。「それぞれ旅や出張が多くてなかなかタイミングが合わないで、朝ごはんは二人でなるべくとるようにしています。私が朝ごはんを食べないと力が出ないというのがありますけど、なので、朝は土鍋でご飯をおいしく炊く、ということ頑張っています」

コロナ禍を経て家で過ごす時間を見直すようになったという衛藤さん。友人の料理家さんからキムチ漬を教わっているのだそうです。「私が習っているのはシンプルな方法ですが、いい材料を揃えてくださるのでとても美味しい。梅干しも漬けます。梅を干して、裏返して、という手仕事が好きだし、自分で作ったと思ったら愛おしくて、すごく美味しく感じられる。時間があればもっとやりたいですね」

好きなものに囲まれてリラックスできる場所

自宅で写真編集をすることも多い衛藤さん。疲れたなと思ったら台所に行くそうです。「作業部屋のパソコンから離れて食器を洗ったり、なんかちょっとお腹空いたなあと思ったら、ご飯に納豆かけて食べたり。台所には窓があつて気持ちよくて、いちばんリラックスできるところが台所なのかもしれないです」

台所道具は自分で選んできたものばかりなので、好きなものに囲まれていると安心するの



「花を挿したり台所道具を入れても良さそう」と、衛藤さんがピシヨップで選んだのは白いホーローの計量カップ。「ほっそりした形も好きです」
LABOUR AND WAIT | ENAMEL MEASURING JUG WHITE 7,700円(税込) / 3F ピシヨップ

①韓国の市場で買い求めたアルミの鍋はサイズもいろいろ。②丈夫なあけびの蔓のかごは一生もの。③好きなものに囲まれる台所は心落ち着く空間。④修理してもらった竹のトレイは毎朝活躍。⑤白い器を集めるのが近ごろのマイブーム。⑥大切に使いたいお気に入りの道具たち。

Photographer
衛藤キヨコ
Kiyoko Eto



1976年、大阪生まれ。東京を拠点に雑誌、書籍などを中心に活動中。人、食、旅など幅広いジャンルの写真を手がけている。

ので器以外は割と安いものが多いです」と写真を見て指さしたのは、韓国の市場で買ったアルミの鍋。「ゆで卵とか、ほうれん草を茹でたりとか、普段使うのは軽い鍋に限りません。ガツガツ使って、ペコペコになって、本当にごめんさいと思うところまで使っていますが、そういうのも味やな、と思っています。こういう道具たちって決して高くないけど、魅力がありますよね」

突然に訪れる一生に一度の出会いも

お湯呑みを盛るかごは、一生に一度の出会いだったそうです。「あけびの蔓で編んだ作家さんの作品で、一生ものやなと思って使っています。これは、自宅の近くにある日用品のお店で見つけました。器を中心にとってもセンスのいいセレクトのお店なので、突然こういう出会いがあったりする。信用している店だからこそ、そこで買うというのがありますね」

かごの上のお湯呑みは、20年近く前に撮影で訪れた骨董屋さんで出会ったもの。「その頃、と衛藤さん。「結構、ものは少ない方なんですけど、台所だけは多くていいと自分で決めてます(笑)」。

そんな衛藤さんが楽しんでいるのは、「道具パトロール」。「どうしても、自分の好きなものばかり使っているんで、今日はこちのお茶碗を使おうかなとかね。それでも心が向かわないものは手放そうかなとか、四人用の鍋なんて我が家は二人なんで絶対使わへんとか、パトロールしているところですよ」

自分にとって大事なものが「逸品」なのかもしれない

パトロールをしていると、逆にずっと使い続けたいものが見えてきます。「この竹で編んだトレイは毎日使っていて、一箇所、ボソって切れたんです。買ったお店に持って行ったら直せますよって直してくれて。ほらここ、リズムが違うと思うんですけど、これも味になっていい。これは、大切に使っていきたいですね」

高価ではなくても自分にとって大事なものが「逸品」なのかもしれない、と衛藤さん。「そういう大切にしていきたいものは結構持っています。さっきの湯呑みも、割れたら金継ぎするんちゃうかなと思います。したことないですけど(笑)」

「逸品とは、自分が好きなもの、大切に使い続けたいと思うもの。そうした品々を自分の気持ちに正直になって選ぶことが、自分にとっての心地いい空間や時間につながるのかもしれないですね」